新しい土地に、人の想いを育てる

柏市長
秋山浩保
あきやま・ひろやす

1968年柏市生まれ、柏市育ち。経営コンサルタントとして企業役員を歴任。2009年より市長に就任、現在二期目。財政の健全化に取り組みながら、積極的なコミュニケーションにつとめる。モットーは「初心忘れるべからず」

ゴルフ場が広がる未開発地域だった柏市北部。ここにつくばエクスプレス線（TX）が開通したのは2005年8月のこと。現在の柏市は未来型都市として変貌を遂げている。柏の葉キャンパス駅前には今年7月、エネルギー管理、医療機関と健康サービス、オフィスや研究室、居住空間、商業施設などのあらゆる都市機能が集積したゲートスクエアがオープンした。推進の核となったのは、柏市、千葉県、東京大学、千葉大学が共同で策定した「柏の葉国際キャンパスタウン構想」。環境未来都市として、最先端のエネルギー設備も兼ね備える。

「1954年に市が設立した当時、人口は4万人だった。それが現在は40万人。ほとんどの方が柏市の外からいらしたということです。」と語るのは、秋山浩保　柏市長。「最先端の仕組みや設備ばかりに目が行きがちですが、コミュニティがなければまちは継続していかない。今は柏市のコンセプトに惹かれて移り住んだ若い夫婦も多い。ただ、その子供たちが成長した後のことも考える必要があります。」

ここで生まれ育ったのではない人々に、いかに土地への愛着を持ってもらうかが課題となった。「大学や企業との連携において、市の役割は『前向きな雑談』を促進することと言えるかもしれません。」無意味なおしゃべりのように思えても、お互いがふれあう機会を持ち、時間を共有することで、新しい発想が生まれ、その土地への思い入れが醸成される。

「マーケティング用語で、新たなライフスタイルなどにいち早く反応し、行動を始める人々をイノベーターと呼びます。まちづくりを先導しうる方々にどう協力して頂くかが重要だと考えています。」様々な仕掛けに触発され、「ビノキオプロジェクト」を応援するチームや子育てママの作るウェブサイト「ままてぃ」など、市民発の活動が続々と立ち上がっている。

投資判断にも、先を見据えた判断を行っている。「短い期間で捉えると、派手な事業に着手した方が、行政として評価される場合もある。しかし、長い目で見た場合に、本当に必要なものかどうかを考えた投資が必要です。」民間出身の市長ならではの視点と言えるのかもしれない。

「技術の世界では、先行者はどんどん落ちぶれていくものなんです。スマートシティも、今は先進的だとしても、十年後はわからない。その時、土地や身近な人に対する想いこそがまちの資産となります。市の仕事は、その想いを育てることだと思っています。」

KASHIWA
CITY

人とまちがともに成熟する未来へ

21 世紀になってから開かれたこのまちは
環境、健康、産業育成という社会の課題に
創造的に挑戦するための新拠点として構想された。
計画段階から実装段階へ、柏の葉スマートシティは、
セカンドステージに向かっている。

先験的なコラボレーション体制「公・民・学連携」

柏市のまちづくりの基盤は、行政（公）、大学（学）、企業・住民（民）の「公・民・学」連携にある。この体制を支える装置として、東京大学の故・北澤猛教授が最初に提言したのが柏の葉アーバンデザインセンター（UDCK）の設立だった。2006年の設立以来、まちづくりを支える象徴的な場として、人が集まり、時間を共有しながら知恵を出し合ってきた。

「公」の立場で構想段階から現在まで、計画推進の中核を担ったのが石黒博　柏市副市長だ。「単に鉄道ができたから沿線を開発するということではなく、今後の柏市を牽引するような拠点を作りたいと考えました。」

都市計画において、大学は有識者やアドバイザーに留まるのが一般的だ。しかし柏市では大学の積極的な関与があったことで、先端の研究成果を盛り込むことができた。「大学と行政が一体となったまちづくりの実践は当時でも新しく、わくわくする経験でした。」既存の枠組みでは対応できない部分にも、制度の見直しを図りながら取り組んだ。

UDCKの提供機能

- 調査・研究・提案（シンクタンク）
- 調整・支援（事業推進コーディネイター）
- 市民や社会の参画促進（情報発信）

柏市副市長
石黒 博さん

市企画部長を経て、2010年より現職。「いまの時代に、新しいまちをつくるという経験自体がとても貴重。行政の職員も大学や民間と一緒になって、制度を越えた新しい提案をすることが求められる。このエリアの開発は、非常に勉強になっています。」

三井不動産株式会社
柏の葉街づくり推進部
中田聖志さん

環境未来都市に採択されたのは震災後のクリスマスのこと。「柏のポテンシャルを磨くまちづくりを進めてきて、ようやく日本を代表する『kashiwa-no-ha』を、世界に提案していくんだなという想いでした。」

実証実験・事業創出

先端知・先端技術と
地域の連携サポート

エリアマネジメント

持続的な地域運営体制の
構築支援

学習・研究・提案

まちづくりにかかる
研究・提案・人材育成

デザインマネジメント

質の高い空間デザイン
形成にかかる調整・支援

柏の葉アーバン
デザインセンター
副センター長
三牧浩也さん

UDCKの存在自体が「【まちづくり】の【つくり方】の仕組みを模索する、実証実験のようなもの。専門家が責任を持ちながら提案し、実現のコーディネートを担う仕組みは日本にまだまだ足りないのです」

今年移転した三代目のUDCKは、駅前にオープンデッキとラウンジの大きな窓が開ける。会議室であり、教室であり、子どもたちのワークショップスペースにもなる。組織を横断して連携するプロジェクトメンバーが、打ち合わせの合間に立ち話も交わす貴重な空間だ

続々と新たな施設や設備が完成しているように見えるが、まちづくりに終わりはない。UDCK副センター長の三牧浩也氏は、大小合わせて数十のプロジェクトを進行する。

「参加者と役割に応じて、毎日のように打ち合わせがあります。」行政の組織区分では賄えない役割をつなぐ機能を果たしているという。住民と対立的になりがちな場面でも、第三の当事者として、塩梅を利かせてきた。東京大学では都市計画の演習を受け持ちながら、柏市のまちづくりのコンサルタントとして関わる。大学にとっても、最新技術を地域の生活のなかで実験し、フィードバックを得られるまたとない場だ。モビリティシェアリングや、ITSによる都市交通システムの構築など30以上のプロジェクトが進行している。企画から運用に携わり、研究と施策の実践を両立させる。

構想の具現化を推し進めたのが三井不動産をはじめとする企業や団体だ。三井不動産　柏の葉街づくり推進部　中田聖志氏は、スマートエネルギーの実装から、地域コミュニティづくりまで、民間の立場からまち育てに取り組む。

開発プランについて市から許認可を受けるだけではなく、まちの開発のルールのあり方にまで一緒になって検討を重ねる。いろいろな考え方や意見が交錯することもある。「もとの地権者や、新たに住まれた方が、まちづくりに共感し、一緒にまちをつくる関係になれた時、本当に嬉しいです。」ピースを集めるように、まちづくりの仲間を増やしていく感覚だ。

駅前街区が開かれ、受け入れる場所ができた。次のフェーズでは、さらに企業や研究所を招き入れ、巻き込みたい。その新たなシンボルとして今年4月に開設したのが、柏の葉オープンイノベーションラボ（KOIL）だ。国内最大級のコワーキングスペースや工房を備え、人材交流と産業の活性化を促進する。

柏の葉オープンイノベーションラボ KOIL

先端技術で支える環境・エネルギー・健康

柏の葉スマートセンター

AEMS（エリアエネルギー管理システム）のコントロールセンター。今後の自営送電網の整備をともなうスマートシティの拡大も見据え「創エネ・省エネ・蓄エネ」を管理する

最先端の技術やシステムをまちに適用し、社会が抱えるさまざまな課題を解決するべく、次世代都市のモデルをまちのサービスに実装したのが柏の葉スマートシティだ。

柏の葉キャンパス駅を中心とする市街地は、産業や商業と住宅が一体となった複合的な開発が進む。今夏、駅周辺の12・7haにわたる先導エリアでスマートグリッドが本格稼働した。柏の葉AEMSを中心に、分散した太陽光、風力、ガスなどの電源を併用、電力を融通し、住居の共用部、ホテルや商業施設など用途の異なる施設の間でエネルギーのピークカットを行う。災害停電時には自営の送電線で三日間の電力供給を確保する仕組みも、あわせて総合特区指定を受けて実現した。

参加意識を高めながら、環境に関わる生活を誘発するしくみづくりも重要だ。柏の葉HEMS（ホームエネルギー管理システム）を備えた住居では、家庭と地域のエネルギー状況をモニターし、地域全体のピークシフトに住民が参加する仕組みが実用化されている。

健康・高齢化の分野でも新たな取組みが始まった。今年、日本初の取り組みとして「健康未来都市かしわ宣言」を公開。受動的に福祉サービスを受けるだけでなく、健康な生活を市民がデザインするという意識変革を狙い、高齢化研究や生涯学習プログラムと連携した健康づくりの拠点まちの健康研究所「あ・し・た」を設立。医療にとどまらず、美容をはじめ健康のカギとなるサービスを展開する各企業と協力し、敷居を低く、健康づくりの仲間と出会える入り口を用意するなど、まちぐるみの取り組みを提案している。

かしわスマートサイクル

柏市オリジナルデザインの駐輪ラックを開発し、先行的にTX高架下ポートに設置、2014年8月下旬より運用開始

いろんな乗り物“街乗り!”

車両は市内に設置された複数の無人ポートで電気自動車や電動バイクをはじめとしたさまざまな種類の車両を24時間レンタルできる

スマートシティミュージアム

街の未来ビジョンを共有しながら、最新技術がある「未来」の暮らしを体験するスマートシティミュージアム

まちの健康研究所「あ・し・た」ワンポイントアドバイザー
野村志津江さん

まちの健康研究所「あ・し・た」は、「あるく・しゃべる・たべる」を推奨。社会参加でかならず発生するこれらの行動は、予防医療的な効果が実証されている

まちと人が育てあう上質なコミュニケーション

ピノキオプロジェクト

まちは、気づきに満ちた学びの場になるというコンセプトの「五感の学校」の一環として行っているピノキオプロジェクト。「写真は、子どもたちが一日花屋さんを開くピノキオ花屋さん。国立がんセンター東病院で来館された方に向けぶーケとメッセージカードをつくる

ＴＸ沿線育児情報検索サイト「ままてぃ」

ママが企画・運営するママのためのコミュニティ
http://mamatx.net/

「ままてぃ」代表
篠原晋寧さん

「ままてぃ」の活動をはじめたときも「自分の仕事みたいに考えれば楽しくできるんじゃないかと思って」と話すほど、働くことが大好き

柏の葉アーバンデザインセンター
ディレクター
小山田裕彦さん

「ぼくらの仕掛けの枠を越えたとき、より質の高いコミュニケーションが生まれていくと思います。」

町内会もまだない土地を住宅として開発してきた柏市では、支え合いの絆や街への愛着も、人の手でゼロからゆっくりと育んでいる。

勤労感謝の日に開催され、街の名物となりつつある「ピノキオプロジェクト」では、子どもたちが商業施設やまちのなかで職業体験をする。いまや公園デビューならぬ「ピノキオデビュー」と言われるほど、街の子育てコミュニティに根付いてきた。仕掛け人は、UDCKディレクターの小山田裕彦さんだ。「テーマは『試行錯誤と実践』です。このまちの何を子どもに伝えたいか、どんなことをして暮らしたいか、保護者や、ここで働く大人たちが一緒になって考える。街全体のコミュニケーションを活発にするためのプログラムですから。」子どもたちがピノキオのように良いことも悪いことも経験しながら想いを伝えて育つ様子は、街が立ち上がってゆくプロセスにも重なる。

「このまちには寛容性があるんですよ。公共空間をダイナミックに使って、住民がまちづくりの力量をつけてくることができました。」

育児情報をＴＸ沿線の駅名で検索できるウェブサイト「ままてぃ」を立ち上げた篠原晋寧さんは、四歳になる一児の母。子育てをはじめたとき、地域で「孤独」を感じたという。そこで立ち上げたママサークルの活動が原点となった。その活動が広がり、現在では子育て情報の発信活動にも本格的に取り組んでいる。

いま、十数人が集まって千葉大学の生涯学習プログラムと協力し、学びながらまちのガイドマップを作っている。子どもとまちを楽しめる情報を、これから子育てする人たちと共有したい。隣の市や沿線に住む、同じ気持ちの「ママ」たちにも仲間の輪は広がる。「お金で済ませられるサービスがたくさんあるということは、人と関わらずに済ませられるということ。目的なく立ち寄れて、知らない人同士でも交流が生まれる場所が公的な場だと思います。そんな場を作りたい。」

環境未来都市の取組みも、生活実感として感じられることが必要だ。「自分たちの子どもたちが愛せる地元になるように。実際に暮らしているわたしたち住民が、この街をどう使っていくかを考えていく時期だと思っています。」